

高濃度に放射性セシウムで汚染された魚類の汚染源・汚染経路の解明のための緊急調査研究

－ ①高濃度放射性セシウム検出海産魚の汚染源・汚染経路の解明 －

配分予定額：1.3億円

○東日本太平洋側では、津波被害からの復旧・復興が進んでいるが、水産物への放射能汚染が懸念され、「八丈島沖で漁獲されたカツオをいわきに水揚げしただけで単価が大幅に低下」等の**風評被害が発生**。

水産基本計画（平成24年3月閣議決定）（抄）
「消費者の不安感の払拭と風評被害の防止に関係府省等が連携して取り組む。」

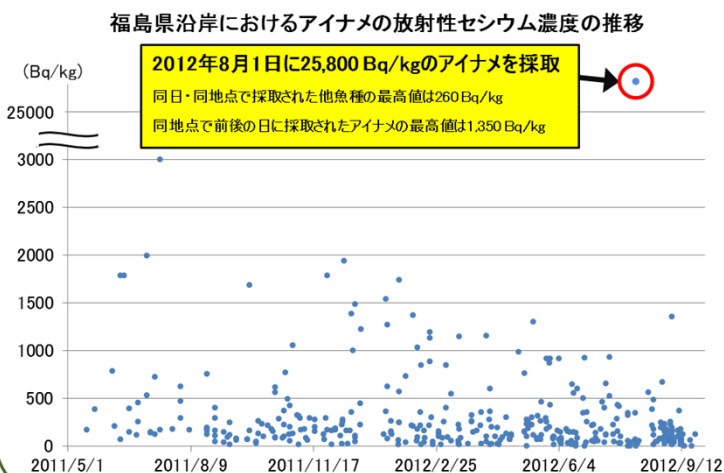
これまで、風評被害対策として、

○水産庁と各自治体は、**約1万9千検体（平成24年9月末公表分まで）のモニタリング検査**を行い、水産物の安全性を確認。放射性物質濃度は、**一部の底魚等を除き低下傾向**。

○HPでの検査結果開示のほか、消費者庁主催のリスクコミュニケーションに加えて**水産庁独自の説明会を40回開催**。

○今までの傾向に反し、アイナメ、クロダイ等で、高濃度の汚染が突如検出され、大きく報道。→「福島県では、タコ類、貝類等の安全な魚種に限定した操業を試験的に再開したが、**原因不明の高濃度汚染魚が発見されるので、試験操業の漁獲物まで消費者から敬遠**。」

（福島県漁業者）等
福島県及び近隣県における水産業復興の障害。

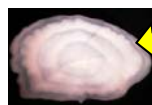


省庁を横断した知見を結集し緊急に原因究明に着手すべき理由

- ・早期の説明が、消費者の信頼確保及び風評被害防止の双方により有効であること。
- ・汚染源が拡散・移動する前に調査する必要があること。
- ・漁業者が一刻も早い操業再開を望んでいること。

主な実施内容

1. アイナメ等から抽出した耳石中の放射性物質の分布を分析する技術を確立し、高濃度の放射性物質が体内に取り込まれた時期等を明らかにする。



耳石は、魚類の頭部にある硬組織であり、成長に伴い年輪様の日周輪を形成する。形成過程で体内に取り込んだ放射性物質が沈着するため、放射性物質を取り込んだ時期が同定できる。

2. 海底土の放射性物質濃度を、連続して計測できる曳航型の装置が、今夏新たに開発されたため、これを用いて、これまで点でしかわからなかった原子力発電所周辺等の海底土の汚染を面で把握する。

3. 標識放流等（バイオロギング）により、高濃度の汚染地域周辺に生息する魚種について、行動範囲等の生態的特徴を明らかにする。

実施機関：農林水産省（農林水産技術会議事務局、水産庁）、（独）水産総合研究センター、（独）海上技術安全研究所、東京大学生産技術研究所海中工学国際研究センター、東京大学大学院農学生命科学研究科
協力機関：福島県

得られる成果：①高濃度汚染魚の汚染原因と経路の解明 ②海底の汚染状況の詳細な把握

各省庁の施策に与える効果

- ・HP、説明会等で、得られた知見を農林水産省から国内外に発信することにより、現在流通している水産物に対する消費者の信頼性確保及び風評被害防止の双方に寄与。
- ・今後の漁業再開に向け、水産物及び生息環境のモニタリング手法の最適化に寄与。
- ・高濃度に汚染される可能性のある魚種や海域の特定による、より合理的な出荷制限の設定（解除）に寄与。